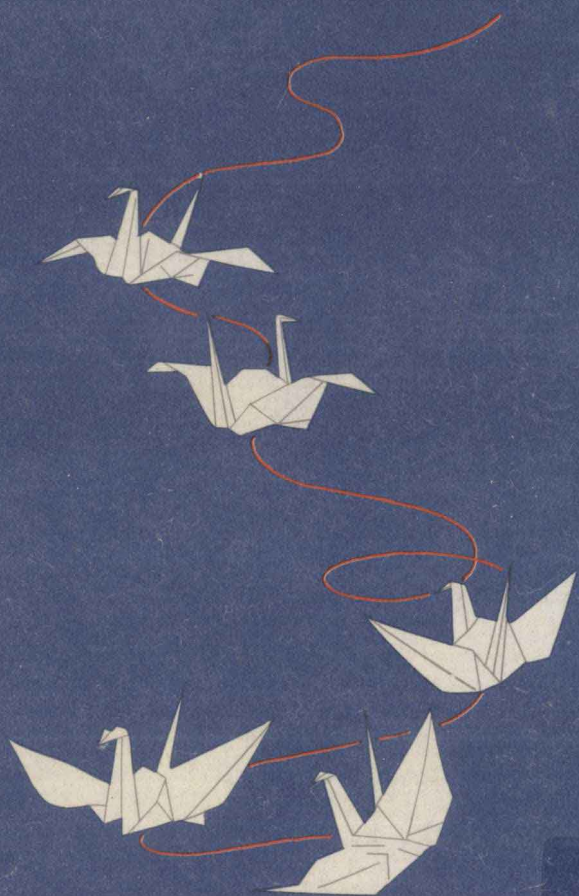
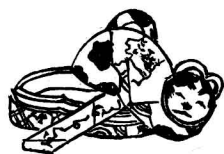


千代第

乙重志



三 月 七 日



明治四十年三月廿八日印刷
明治四十年四月一日發行



著 者 鈴木三重吉

東京市日本橋區小舟町二丁目五番地

發 行 者 坂山仁三郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印 刷 者 太田音次郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印 刷 所 株式會社 秀英舍

發 行 所 東京市京橋區築地二丁目廿五番地
俳 書 堂

(郵便振替貯金口座第二四一七番)
(電話番號新橋二八八番)

《紙代千》

三月七日

「鳶、鳥、雀、梟、鳩、鶉、」

綺麗な六疊の離れてある。一通の長い手紙が、赤い絹糸で釘へかけて床の真ン中に七八尺ばかりさら／＼と下ツて、下に垂れ敷いた裾に、小さい貝殻が十ばかり寄せて押へてある。小さい／＼鮑の貝、いたら貝、にし貝、法螺貝、それだけしか名は知らぬ。一々ちがツた小さい貝だ。其横に黒い壺に菜の花が挿してある。手紙は女の筆蹟だ。

貝殻ならまだく／＼いくらでもある。押入に薄い柿色の絹襖が嵌ッてゐる。其襖の様子が貝盡しだ。さま／＼の貝が一面に散らばッてゐるのだけれど、淡く織り出してあるのだから斜にすかして見ないと一寸目に附かぬ。

麗らかに日影のさした障子の隅へ黒塗の一閑張の机を据えて、横の櫺子窓の壁に小さい般若の面を懸けて、紫の甲斐絹の座蒲團に、うら若い男が座ッてゐる。座ぶとんの兩耳をいぢくりながら上目に障子を見詰めて、

「目白、頬白、山雀、十四松、豆廻し、」

と口の内で言ひながら、其たんびに一つ／＼軽く頷いてゐたが、其内に不圖氣が附いたやうに机の上の手紙を長く何尺も／＼巻き返して、状態袋に入れて上書きをして、硯箱なんかすっくり机の下の煤竹の箱の中

へ仕舞いこんで、手紙を提⁺げて小首を捻⁺ッて出て行ッた。

障子の日影が弱くなッた頃、新聞紙でくるんだ何か箱のやうなものを抱へて歸ッて來た。顔が少し火照^ホッてゐる。抱へてゐるものを徐^{ソコ}ッと机の上へ置いて、兩膝を突いて、包の眞^{マコ}中を指で突き破ッて、片目を嵌めて眞上から覗いてゐる所へ、下女がビスケットの罐と小さい糊入れのやうな白い壺を二つ、盆へ乗せて持ッて來る。一つの壺には水がいれてある。

「オイ、ついでにこれを提⁺げていけ」

と言ッて男は包みを括ッた細繩を解く。

新聞を撥^ハッたら鳥籠である。中に眞白い文鳥が一匹ゐる。嘴と目の縁だけ赤い、綺麗な小鳥である。棲り木へ棲ッてキョロ／＼と不審さうに見廻しては首を傾けて考へてゐる。咽をグル／＼と鳴らす。白粉の

やうな糞フンを二つたれてゐる。男は罐カンを開けて壺へ粟を一ト握り入れて籠の中へ入れかけると、鳥は怖れてバタ／＼／＼と殺されてもするやうに騒ぎ廻マワつて手ささへバサと撲ムクつ付かる。粟がジャリ／＼と散る。水の壺を入れる時もまた騒ぐ。男は惚ホれてゐる女に、言葉のはしを曲げて考へられたやうな氣に一寸なる。鳥は隅の方へ縮チヂまつてゐたが、恐れに棲り木へ戻カエつてチツ／＼チと言ひながらぐる／＼と見廻してゐる。男は只チツ／＼と啼くだけか知らと考へる。鳥は動悸ドウキを打たせてゐる。胸に灰色の毛が交マシじつてゐるやうに見える。變だと思つてよく覗いて見たら胸騒ムネウラぎに毛がフハ／＼と割れて中が蔭になるからであつた。斑フクロはない。眞ッ白い威張イカリつた毛なのである。いく度も飛ばうか／＼といふ風附フキきをしてゐたが遂に向ふの棲り木へひらりと渡る。チツ／＼と啼きながらひらり／＼と往きかへる。暫くして壺の所へ下りて

栗を食ふ。コック／＼と嘴を突ツこんで急がしげにしてバチ／＼と噛みしめる。チツ／＼と啼き／＼續けて何べんも食ふ。

男はこれで一ト先づ安心して籠を床の上へ移してこちらから眺める。羽根は雪のやうな色だと思ふ。雪とは觸りや澤や肌理がちがふ。白絹、真綿、奉書、何か外にこのとほりの物はないかと考へる。矢ツ張り白い羽根しかない。嘴は何かのやうで一才思ひ出せない。紅の色が根元からだん／＼とぼかしになツて口の縁の所は白くなツてゐる。目の玉の粒は緒實を漆で塗ツて硝子で包んだやうだ。深い黒で活き／＼と光ツてゐる。目の縁は赤い絹糸を三本位合せて嵌めたやうだ。足はハムの色、珊瑚の色だ。小さい爪が細長く白く曲ツてゐる。

嘴の何かに似てゐるのはどうしても思ひ出せない。撲ツ切飴にこんな色のがあツた。譲り葉の莖の色。いゝやまだ何かだ。何か詰度そツくりの

物を見た事がある。何やらだ何やらだと男はいろ／＼の記憶を穿^{ホセ}ツてみる。頭の周圍^{グレイ}をちら／＼する癖にどうしても捉へ出せない。錦書を粉にして振り撒いて、むら／＼落ちる中の一粒を紛れなく見別けてゐやうとするやうだ。百里のさきの女を戀ひ／＼て飛べば飛んで行けさうに見える時の氣持ちだ。考へ飽ぐんで唄に酔ふたやうな氣持ちになる。綾さんの事が浮んでくる。いろ／＼の場合がちら／＼と浮ぶ。――さうだ／＼。嘴はあの時の行燈だ。

一ト夜綾さんの内の小二階で朱塗の行燈を點して狐の嫁入の江戸繪を缺^ツむ。まだ少さい時だ。自分がつんで行く切り屑を綾さんが一つ一つ拾ツて千代紙の小箱へ入れる。一ばんはじめの提灯持から順々に切り取ツて嫁さん狐のお駕まで来て、手が痛くなツたからこんどは綾さんに代ツて貰ふ。此缺は大きくて持ちにくいといふ。やツとの事で一つ

出来る。其大小の尻を落してはいけな^いと言ッて側^{ハタ}から指圖をする。火が暗いと綾さんがいふ。明るくして上げると言ッて行燈を開ける。見ると小さいく小女郎が小棲を取ッて燈心を踏んでゐる。あゝ小さい姉さんだと言ッて頭をつまんで燈心を掻き立てる。――それだ。嘴の色は其焼物の眞ッ赤な小女郎の色である。

鳥がクルくく千代くくお千代ッ」と啼く。男は微笑んでかわいゝ啼き聲だと嬉じがるも。一つ啼けと待ッてゐる。鳥は棲り木を横にいぢりながら千代くくお千代といふ。くると向き變ッて又千代くくといふ。こんどはお千代くくおちよーうッと仕舞を甲走^{カサ}ッて長く引ッ張ッた。男は嬉しさうである。何か籠へ綺麗な紐が附けたくなる。行李の中に緋縮緬の小紐がある。沖の暗い中に火が二つ見える。汐が欄干の下へざわくと寄せる。綾さんか床を伸べると卓さんが一

ばんに轉げる。自分は蚊屋を釣りかける。綾さんが向ふの端を釣らうとする。

二人して釣り損ねたる蚊帳かな

といふ句が出来る。綾さんがホ、と言つて釣りかへる。あんまり引ツ張りすぎて一つの釣手が切れて了ふ。繫いで見たが短かくていけない。いゝ事があると言つて綾さんが帶の下の小紐を解く。三四日して綾さんが歸つて、卓さんと二人になつて二十日ばかり逗留してゐた間、其緋縮緬の紐がそれなりで蚊屋の釣手に下つてゐた。其の紐を押入れの行李の底から取り出して來て、片はしを籠の上へ垂らして見る。色の具合は大變いゝが少し太すぎて配合ツッパが悪い。どうかして此紐を附けるといふにと思つても仕方がない。赤い絹糸を買つて來て二三十本一所にして附けたら丁度いゝだらう。この邊へ附けるんだと籠の眞中を二本

指でつまんで、上げて見かけると籠は片方ばかり上ッても、少して水がこぼれる所であつた。壺などがあるのだから眞ン中ではいけない譯だ。机へもどる。

鳥はを水飲む。粟を食ふと同じにもくくくと嚙むやうにして咽へ入れる。三四度飲んでブルくくと身軀^{カラダ}を振うてまた何べんも飲む。

男は三四時間も歩き廻つたので一寸くたぶれた。机の上へ片肘折ッて額を附けてうつ伏しになる。鳥がチツくと短かく啼く。綾さんの事がまた浮ぶ。あれは十四五の頃である。碧く黄昏れる夕空に月が薄く出てゐる。綾さんくと呼びながら檜の林の中を尋ね廻る。薄黒い水のほとりへ来る。綾さんくと言ッても返事がない。水際に木瓜^{ボクダ}の花が低く咲き續いてゐる。水を廻らうにも右には荊棘^{トゲヒ}があつて通られぬ。左へ行ッたッて少し行くと木が詰ッてゐるから抜けられない。飛べば渡られ

さうに見えるけれど實際は四五間もあるのだから飛び越す事は出来ぬ。困つて水の面を見る。底に藻草が黒く生へてゐる。向ふの岸の茨の中に仄白い花が一かたまり水に低れ下つてゐる。莓草イチゴの花を何百もく寄せ合はせたやうに白い。水の上に小皺を疊む風もないのに、花のかたまりはふはりくくと微かに揺れる。仄暗いから何の花とも見別きが附かぬ。小石を捨て投げて附けて見る。花がばらくと捌けたかと思ふと再び元の一かたまりになる。今度は大きな石を掘り起して、うんと投げ付けやうとしたが、ふと思ひ停る。も少し小さい石を投げつける。バラバラと立ち騒ぐ。——蝶々だく。蝶々が夜なく寝に來る所が知れた。

鳥がまた千代くとはじめる。

背中を揺するものがある。顔を上げて見ると下女である。いつの間にかうたゝ寝をしたと見える。あたりはすつぷり暗くなつてランプが附

いて居る。一ばんに文鳥を見る。物さびしげにして徐^ヂツと棲^スツてゐる。壺のまはりへ粟の殻を行儀わるく撒きちらしてゐる。手紙へもバラ／＼飛ばしてゐる。これは何だか興がある。夜は暗くして寝せてやれと鳥屋が言^イツた。風呂敷を出して籠へかけてや^ツたが再び撥^ハツてそれをわが目の前へ釣^ツるして火を遮^セツて見て、これでは矢^ヤツ張り明^アるいと思^{オモ}ふ。押入の中へ入れる事にする。上の段には綺麗な洋書ばかりが二列に列べて詰^ツめてある。高低くのない所へ籠を縦に置いて上から風呂敷をかけ置く。もしか本の上へ水が覆^{カキ}れる事はないだらうかと少し氣にかゝ^ッたがそんな事はない事にして襖をしめる。

此夜男は原稿紙に向^ムツて熱心に書いてゐる。此間から毎日／＼書いてゐる。こんどはじめての作を出すのである。詰^ツタらしいのも後ろを向いて押入の襖を見詰^ツめて考^カへるのがお掟^{キマ}りである。一寸大作なので、出

來上ツて本に出す時に此襖の貝盡しを其儘取ツて表紙の模様にする積りなのである。文壇に名を走せたいなどいふ了簡は少しもない。只此の頭では何か書かなければじつとして居られないから書くのである。かいて世に向ふのは囀る鳥が囀るのと同じである。囀るなど言はれたら鳥は苦しがるに違ひない。

今宵は余程油が乗ツてると見えて一度も襖を見ずにすらくと筆が走る。三時間ばかり小休みもなしに書いて來た。少し氣が詰ツたので筆を措いて火鉢の縁に片手をかけて床の間の手紙を見る。此時はじめて綾さんに小鳥の事を知らさなければならぬと氣がつく。二人は互に末の約束を固める事になる。——綾さんだつて自分に副ひたい願が淡く胸の中に漂うてゐるかも知れない。綾さんの姿を浮べて見ると慥かにさう見える。綾さんは懐かしいといふ心の外には何ンにも知ツてゐ

ない女のやうにも見える。而し自分が戀ひてゐるといふ事を告げたら其時戀といふものを知ツて、わたしも戀しいと言ふにちがいない。すでに戀しがツてゐるのだとも見える。あの年になツて戀を知らぬものはなさそうだ。戀だ。馬鹿くしい。知れ切ツてゐる。互に戀の仲なのだ。だから嬉しい約束を取かはす。取かはす時に自分は此文鳥を誓ひの印にして二人が一所になる日まで手元で大事に飼ツてゐてくれと言ツて綾さんに渡す。白いく誓の印だと綾さんが嬉しがツて、鏡台の引出しから紅の壺を二つ出す。一つはまだ紅が澤山残ツてゐる。縁に京の三條の紅屋とかいてある。綾さんは其壺を裏の石がけの根を行くちよろく水で洗ふ。水は赤く染まツて水門へ這入る。泉水の白い水草の花が染まりはせぬか。綾さんの右の手の指が三本赤く染まツた。一つの壺へは粟、一つへは水を入れて鳥籠の中へ入れる。

「わしが早く死んだら、」

と言ふと、綾さんは尊い教を聞くやうな面ざしになる。

「早く死んだら、綾さんがこの鳥を、白い雲の漲った日に小窓を開けて北へ遁がすのだ。」

と言ふと、口元がひとりてに綻びて、

「まア何をちいひなのかと思つたら、」

と言つて、

「そしてあたしが先に亡くなれば、」

「綾さんが死ぬるものか。」

「だからあなたも亡くなりはありません。」

「綾さんは仕舞に白無垢を着て、緋縮緬を口に啣へて雪の中へ埋ま
るがいい。」